

はじめに

アジア・太平洋戦争の末期に日本の陸海軍は「特別攻撃隊」を編成して、爆弾を装備した航空機や舟艇による敵の艦艇への体当たり攻撃をしかける戦法を企てました。敗勢挽回を賭けて兵士の生命を爆弾もろとも兵器として突撃させるこの「特攻」と称された無謀な戦法には、選りすぐられた若い将兵と並び「学徒出陣」で学窓を離れきわめて短期間に訓練された学生たちや予科練出身の少年たちが多く投ぜられました。「志願」の形式をとりながら必死を強制されたこの若者たちを、残された遺稿・遺品によって想起・追悼したいと思います。

現代を生きる私たちはこの歴史から何を学ぶべきでしょうか。

この企画展にあたり、当館所蔵史料に加えて特別に遺稿・遺品を展示することにご協力くださいましたご遺族、諸団体の皆さまに厚く御礼申し上げます。

わだつみのこえ記念館 2014年10月

凡 例

本冊子は、2014年10月20日より12月10日まで、わだつみのこえ記念館において開催される第3回企画展・戦没学生の遺稿にみる「特攻」の史料集である。企画展の展示史料の翻刻、解説、略歴、遺影、遺稿の代表的な部分の画像1点を、戦没日の早い順に戦没学生ごとに配列して収録した。

「はじめに」は渡辺総子館長が執筆し、それ以外の史料の選択・翻刻、解説、戦没学生略歴などは山辺昌彦等3名の学芸員が担当した。本企画展は過去2回の企画展に続き、記念館所蔵などの戦没学生の遺稿を読んできた成果を公表するものである。

翻刻に際しては、以下の方針を採用した。

- ・ 縦書きのものも横書きに変更した。
- ・ 漢字は常用字体に置き換えた。
- ・ 仮名遣いは変えていない。
- ・ 促音は原文表記にかかわらず、すべて小書きにした。
- ・ 変体仮名や合略仮名は通常の仮名に置き換えた。
- ・ 二字分の繰り返し記号は、使用しないで仮名に置き換えた。
- ・ カタカナはひらがなに直した。
- ・ 改行は「／」で示した。
- ・ 中略は「……」で示した。
- ・ 読みにくい文字に、ひらがなで「ふりがな」をふった。
- ・ 脱字を本文中に〔 〕で補い、誤字は正字を〔 〕内に示し、疑問が残るものには「カ」を入れた。誤字等の疑問が残る字は、ルビに〔ママ〕を入れた。解読で疑問が残る字には、ルビに〔カ〕を付けた。

略 歴

1921年（大正10）3月27日生。
上海出身。
静岡高等学校を経て、42年（昭和17）
10月、東京帝国大学経済学部入学。
43年12月、陸軍に入営。
45年1月9日、フィリピンのリンガエン湾
にて海上挺進隊員として戦死。
享年23歳。



解 説

軍隊の中での教育で言われたこと、学生気分、今までのすべてを捨てること、故郷や父母兄弟を思うことなどについて、考察しているところを主に収録した。学生気分批判については、小市民的な根性、プチブル的な根性、利己主義、根気がないことへの批判として受け止めて、自主的、主体的な活動、個人の確立などは、学生らしさとして肯定すべきことを述べている。今までのすべてを捨てることについては、今までの生活や経歴はぬぐいさることのできないものであり、のびのびとした天性と情熱を傷つけるものであってはならないとしている。故郷や父母兄弟を思うことは女々しいことではないとしている。そして何物かに絶対的に支配されることが苦痛であるとし、軍隊生活では強制と非自主性があるため、世間が恋しくなるとしている。しかし、軍隊の中では、考えない、無批判な生活をしなくてはならないと考えるようになっていった。これが、遺書に書かれた「春雄は、凡ゆる意味でやはり学生でした」ということに繋がっていると見えよう。この他、イギリス・アメリカの東アジアへの侵略批判も書いている。空襲訓練を受けているが、そこでは空襲被害への軽視があった。

史 料

一体、吾々の今迄を、凡てを捨てること云ふ事が云はれる。しかしそれは、変った生活様式の中に入り込まねばならぬと云ふ点に於て確かである。しかし、吾々の今迄の生活、経歴はぬぐひ難く、吾々に附いて居る。それは一つののびのびとした天性と情熱とを決して些いささかも傷けるやうな生れ更りかわりである訳がない。（海上春雄『日記』1943年12月5日）

故郷を思ひ、父母兄弟を想ふこと、敢へて女々しい事とは云ひ得ない。それを女々しい事とか、雑念なりと自ら附加（か）する事はかへって自己の純真を乱す事である。／素直になる。素直に生きる事が吾々の信条でもあり、又最上の途でもある。（海上春雄『日記』1943年

12月6日)

形式と精神の合致。この事は色々と高校時代より論議され、且つ考へて来た処であるが内より外に出づる事。これを以って自主の精神と考ふ。外より内への方向を、形式主義と考へて居た。(海上春雄『日記』1943年12月7日)

誠に英米の東亜侵略の野望、以って怖る可きものあり。奔命^{ほんめい}以って之れを葬る可きものである。(海上春雄『日記』1943年12月8日)

学生気分として非難されるのは吾々ののびのびとした本性を指すものではない。所謂都会性を帯びた小市民的な根性、プチブル根性と云ふものがそれである。／少しく学生根性として非難される処を考へて見よう。先づ第一に利己主義である。……自己の安逸と云ふか、自己の快樂と云ふか、一つの統制^[カ]から脱れようとする気持に転化する。それが利己主義を根柢として居るのである。さうして形成された利己主義こそ、学生気分として非難されるもの、それ自体である。／第二には、根気がない事である。先にも述べた小さな利己主義は、例へば一度変な気分に入るや、その直後諦める気にならぬ事である。……自主心の欠除とも云へる。(海上春雄『日記』1943年12月12日)

学生気分と云ふものは、決して学生全体の気持ではない。さうでなく、真にのびのびとした朗らかな気分^{でく}の下で自主的に活動してこそ学生らしいのであり、いくら第三者が見ても之れを捨てゝ木偶の坊になれとは、云へないのである。……本当に歴史的自覚を有する人間ならば、自分が主体的に動かんとするだけの意志と気力を有して居る。それは、必ずや、自分の学校に対する歴史的自覚と、自分の主動的立場の把握とより発するものである。(海上春雄『日記』1943年12月13日)

人間には、何物かに絶対的に支配されて居ると感んずるときが苦痛なのである。(海上春雄『日記』1943年12月16日)

今、軍隊に入つて僅か二週間も経たゝぬのに、もう面会が恋ひしく、娑婆^{しやば}の姿を見たくなると云ふのは如何なる訳であらうか。忠君愛国の精神に欠ける処あつて、軍隊生活そのものに惰性^[カ]を感じぬのであろうか。若し然りとすれば、怖らく日本国民全部が非国民の中に入つて了ふであらう。惟ふにこれはもっと他の理由^{おそ}からであらう。若し軍隊生活を絶対強制と非自主的な生活と断定をせずして、何処に娑婆^{しやば}が恋しくなるであらうか。(海上春雄『日記』1943年12月19日)

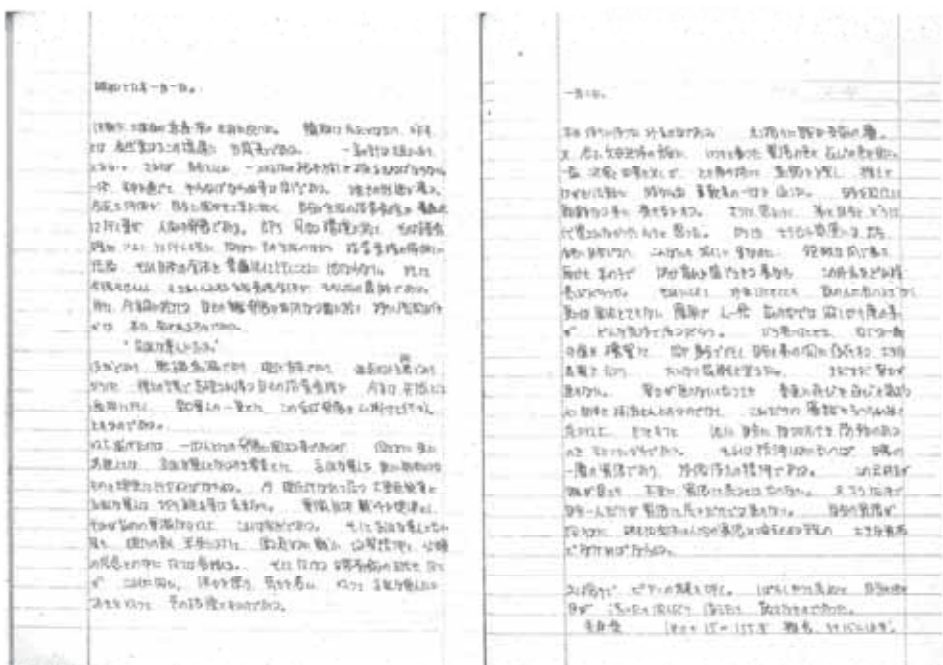
晩飯後、教官殿より、色々と御注意あり。／その中に学生々活と結び付く可き軍隊生活の話と、又、自己弁解について、お話があつた。これ等の事は、今迄色々反省をなし、考へもした処、大いに共鳴する処があつた。その中で自治とは違つて厳格なものである。と云ふ語は真に大賛成であつた。而して之れに連関して大いに考へねばならぬ事は、先づ個人の確立である。……連帯責任と云ふ事はそんな他人転化だけで済まされ得るものでは

ない。(海上春雄『日記』1943年12月29日)

“立派な軍人になる” / 没我^{てんかいふく}であり、転禍^{てんか}為福^{ふく}であり、現在肯定であり、進歩的人生論であり、かうした種々の言葉で表現され得る自己の指導原理を今年は、兵隊として適用して行く。皇国軍人の一員としてこの生成発展を心掛けて行かんとするのである。 / 以上述べたのは、一個人としての発展に関する事であるが、同時に更に前進しては、立派な軍人となる可き要素として、立派な軍人を更に具体的なものと規定して行かねばならぬ。今現在行はれて居る大東亜戦争と立派な軍人は切り離す事は出来ない。軍隊自体戦闘を基準とし、それが為めの軍隊なる以上、これは当然である。そして立派な軍人と云ふ事も、現在の敵、米英^あに対して徹底的に戦ふ攻撃精神と、必勝の信念との中に凡ては含まれる。そして凡ゆる日常茶飯の生活も凡てがこれに向ひ、体力を練り、気力を養ひ、以って立派な軍人たる可きを以って、その根源とするのである。(海上春雄『日記』1944年1月1日)

忙しくなると色々^あと考へる事も少なくなって来る。かうした無批判的な或意味で盲目的な生活をもっと続けなくてはこれからの自分を作って行く訳には行かない。大分前に米元准尉殿から云はれた唯黙々と進め、無我夢中で進めと云はれたその事が、今更のやうに尊く感ぜられる。(海上春雄『日記』1944年1月21日)

実際に空襲^{かか}あった場合を考へて見ると、その可能性は充分にあることであるにも拘らず、その状況は全然想像がつかない。想像し得る以上に惨烈なのか、そうでもないのかが解らない。これは一つには日本人の性格と対値の取れぬ想像だからでもあらう。しかし何はともあれ準備あれば怖れないで厳格な訓練さへしてあれば実際はそれ程でもないかも知れない。(海上春雄『日記』1944年2月10日)



略 歴

1922年（大正11）2月6日生。

福岡県出身。

福岡高等学校を経て、42年（昭和17）

10月、京都帝国大学経済学部入学。

43年12月、佐世保第2海兵団に入団。

44年2月、飛行専修予備学生（14期）に
採用され、土浦航空隊に配属。

44年5月、朝鮮出水航空隊に配属。飛行
訓練を受ける。

44年9月、元山航空隊に配属。特別攻撃隊
要員として速成訓練を受ける。

45年1月、日記『日なり楯なり』を書き始
める。

45年3月、特別攻撃隊命令を受ける。

45年4月、出撃基地鹿屋に到着。

45年4月12日、沖縄海上にて特別攻撃隊
第2七生隊員として戦死。

享年23歳。



解 説

林市造『ある遺書』の口絵掲載の母宛遺書2通から、個人の思いが感じられる部分を収録した。

史 料

昨夜散歩にで、蓮華草レンゲソウばたけにねころんでしみじみと故郷をしのびました。／友達は私をお母さんのにほひがすると云ひました。母と子を感じずるそうです。／私は幸福でした。人に可愛がられたと云ふことは、私のこの上ないみやげです。／腹のたつことがあっても、なつかしい人々を思ふことによって、美しい人々を思ふことによってやはらいでくるこのごろです。美しかりし人々の仲間に居たと云ふ誇りを最後まで失ふことのないように努力をつづけます。（林市造「遺書」1945年4月9日）

指揮所で私の姿が余りさつそう颯爽としてゐたのか（？）／何人もゐる内から特別に報道班員が二三人で写してくれましたよ。（林市造「遺書」1945年4月11日）

履 歴

1922年（大正11）4月12日生。

福島県出身。

42年（昭和17）年、明治学院高等部入学。

43年12月、陸軍に入営。

45年4月12日、沖縄海上にて特別攻撃隊
武陽隊員として戦死。

享年23歳。



解 説

明治学院在学中の長谷川は熱心な勉強家で、とにかく優秀であったと伝えられる。キリスト教に傾倒した長谷川は、天皇や国体には救われることがないとし、価値の根源を聖書に求めた。英語のほかに、ドイツ語やロシア語など積極的に外国語を学び、シベリアで服役中のドストエフスキーが唯一持っていた聖書の価値に思いをはせていた。

史料は当館の所蔵する数葉の手紙と、訓練中の公式記録ノートである『修養録』から、長谷川の心情がにじみ出る文章を抜粋した。文章から感じられるのは長谷川の持つ高い教養と家族への誠心、そして一途な恋心である。そして同時に、就学中に身に着けた高い教養と勉学への意欲が、軍隊生活においては何の意味も持たず失われていってしまうことを嘆いている。彼の文章から感じられるのは、聖書に精神のよりどころを求め意欲の赴くまま勉学に励みたいと願うも叶えられず、不自由な軍隊生活にあっても好いた女性の影を追う悩める若き青年の姿である。

長谷川の経歴や明治学院時代の豊富なエピソードについては『明治学院百年史』にくわしく、学院出身の学徒兵としてそのはかない生涯が描かれ、二度と繰り返されてはいけな悲劇として詳細で堅実な記述にまとめられている。

史 料

船田は女高師の家事科にゐるのだが……／俺は見事に^{◎◎◎}フラレタ。けれど今はもう落ち着きを取戻した。俺に文をよこすときは封筒を用ひてくれ。俺がFにデザヴしなかったからだ。と自分に因果を含めてゐる。俺は、俺一人で、俺のセツルメント・ビジネスをやつてゆくことになるだらう。／女といふものは所詮信用できん。といふ結論に達したから。Fも今度こそホントウに他人となつてしまった。右お知らせまで。（1941年7月7日消印、渡部亨宛長谷川信葉書）